

南海110年略史

◎阪堺鉄道から南海鉄道へ

明治17年(1884)6月、わが国初の純民間資本による鉄道会社・大阪堺間鉄道が生まれた。これが当社の歴史の始まりである。

大阪財界の重鎮であった藤田傳三郎氏や松本重太郎氏など19名が発起人となって設立されたものであり、同年11月には社名を「阪堺鉄道」と変更した。鉄道建設工事は順調に進んで翌18年12月27日に難波～大和川間7.6^キを小型SLで開通。その後、21年5月に堺の吾妻橋まで路線を延ばし、当初の計画どおり難波～堺間の全通となった。

この阪堺鉄道開業を機として第一次私鉄ブームが起こる。そうした中、22年に堺～和歌山間を結ぶために計画された紀泉鉄道と24年に発足した紀阪鉄道が合併して28年に南海鉄道が誕生した。同社は30年10月に堺～泉佐野間を開通したのち、31年10月には阪堺鉄道の事業を全面的に譲り受けてさらに延長工事を進め、36年3月、難波～和歌山市間全線を開通させるに至った。

◎電車時代の到来と戦時統合

明治後期から大正にかけて、電化による第二次私鉄ブームが広がり、箕面有馬電気軌道(現阪急電鉄)や大阪電気軌道(現近畿日本鉄道)など関西の有力私鉄が相次いで開業した。

明治40年(1907)にいち早く難波～浜寺公園間を電化した南海鉄道も、合併による路線拡大を急ピッチで進め、42年には浪速電車軌道を合併して上町線とし、大正4年(1915)には阪堺電気軌道を合併して阪堺線および平野線とした。さらに11年には現在の高野線である高野大師鉄道および大阪高野鉄道を合併し、14年7月には汐見橋～高野下間を全通するとともに岸ノ里で南海本線と連絡させた。その後、昭和7年(1932)4月には高野下と高野山を結ぶ高野山電気鉄道と相互乗り入れを実施して難波～高野山間直通運転を開始し、現在の当社幹線の形成をほぼ完了した。

この間、昭和3年にはバス事業に進出、7年には難波駅にターミナルビル「南海ビル」を建設して地下鉄との連絡施設を完成させた。

15年12月には運輸当局の指導で、激しい競争相手であった阪和電気鉄道と合併して同社線を南海山手線とした。しかし、翌16年に勃発した太平洋戦争が苛烈化する中で国策による交通事業統合の流れには抗しきれず、19年5月、南



初代の難波駅(明治18年開業時)

海山手線を運輸通信省に譲渡したのち、同6月、関西急行鉄道と合併して、近畿日本鉄道と社名を変えた。

◎新生南海の歩み

終戦後、民鉄各社の中で再独立気運の高まってきた昭和22年(1947)6月、高野山電気鉄道が旧南海鉄道に属した鉄道・軌道全線を近畿日本鉄道から譲り受けたうえで社名を「南海電気鉄道」と改称するという形式をとって、新生南海が発足した。

戦後復興期を過ぎ、創業70周年を迎えて昭和30年代に入った当社は、①四国航路の開設②みさき公園の開園③南海会館の建設という三大プロジェクトを実現し、36年(1961)には和歌山電気軌道を合併して和歌山軌道線(46年にバス輸送に代替)としたほか、バス路線の飛躍的拡大や住宅開発事業の本格化、付帯事業の拡充などでグループとしての大きな成長をみた。

40年代には、難波駅改造整備建設、高野線複線化、和歌山市駅ビル建設といった主要工事など将来構想に基づく中長期計画に取り組むとともに、30年代から推進している輸送力増強計画に基づいて運輸施設の近代化を図った。

その一方で、資産を活用した不動産・流通事業に積極的に取り組む方針をとり、「南海狭山ニ

ュータウン」を皮切りに、「南海くまとりニュータウン」「南海橋本林間田園都市」「南海美加の台」など、沿線各地で数百から数千規模の大規模住宅開発を進めた。また、53年には流通事業部門を新設して同事業に本格進出する体制を整え、難波駅の大改造に伴う複合商業施設「なんばCITY」を約2年がかりで完成させたほか、駅周辺の社有地を有効活用した商業施設「ショッピング南海」のチェーン展開にも注力した。

◎関西国際空港開港から新世紀へ

昭和60年(1985)に創業100周年を迎えた当社は、前年に関西国際空港建設が正式決定したことから、空港アクセス事業や難波地区再開発など、新空港関連事業に絶大な意気込みを持って臨む方針をとった。

その最初の大きな成果が「南海サウスタワーホテル大阪」の建設であった。63年4月に「南海サウスタワーホテル株式会社」を設立して着工、平成2年(1990)3月に開業した同ホテルは、世界へのゲートシティにふさわしいランドマークとして誕生したのである。

この間、バス事業では、堺市のメイン道路として輸送需要の多い堺駅～堺東駅間において、昭和62年3月から関西初となるシャトルバスの運行を開始した。また、高速道路の全国的な整備



なんばCITYオープン(昭和53年)

によって大都市と地方中核都市を結ぶ長距離高速バスのニーズが高まってきたことに対応するため、63年10月から高速バス「サザンクロス」の運行を開始した。

流通事業では、平成元年4月に商業施設「ノバティながの」をオープンしたのを皮切りに、4年9月に「しんかなCITY」、6年9月に「いずみおおつCITY」を順次オープンするなど、なんばCITYのノウハウとコンセプトを生かし、流通ネットワークを強化した。

レジャー事業では、昭和62年6月にみさき公園開園30周年事業として大型レジャープール「ふ〜るらんどRiO」を開設。催し物が開催される春秋の行楽シーズンに加え、夏も多くのお客さままでにぎわうようになった。

難波地区開発については、平成元年（1989）3月、地域関連5社共同の街づくりとする合意が

実現し、同年7月には「難波地区開発協議会」の設立をみた。その後、4年4月には法的対応のため「難波地区土地区画整理事業組合設立準備会」が発足、6年7月には区画整理事業区域を確定するなど準備を進め、7年6月、大阪市への区画整理組合の設立認可申請を行った。

難波地区再開発事業のスタートに向けて着々と準備が進む中、6年9月4日に関西国際空港が開港の日を迎えた。鉄道アクセスの中核を担うことから、早くから空港建設計画に対応してきた当社は、同年6月7日に空港連絡鉄道南海分岐線（空港線）の建設工事を完成させ、6月15日に空港線を開業し、空港開港前輸送を開始していた。

空港開港の日、難波駅において祝賀ムードに包まれながら厳粛な「空港特急ラピート出発式」が行われた。



空港特急ラピート出発式（平成6年）